

それでも円盤は飛ぶ

—空飛ぶ円盤は実在す—

世上「空飛ぶ円盤」と呼ばれる未確認飛行物体にまつわる謎は、その端緒となった一九四七年の米国に於ける最初の目撃事件以来、今もって神秘のヴェールに包まれているのみならず、その実在するや否やに就いて各国における論争は未だに明確な結論が出されないまゝ、今日に至っている。

この十年余の年月の間に世界各地に於て夥しい数の目撃報告が報道されているが、世界的権威ある科学者、なかんずく天文学者或いは米国防空軍当局等のしばしばの否定的声明にも関わらず、その数は依然として増加の一途を辿り、特に最近に於けるソ連、米国の一連の人工衛星打上げを契機としてその傾向がいよいよ強められているとの感を深くする。

われわれもまた日本国内に於てこの三年間に約五百件に上る目撃例を蒐集し、その分析検討に努めてきた。もちろん、これらの中には、気球、航空機、ミサイル、鳥、探照灯等の誤認、或いは流星、火球、球電、曇気楼等の自然現象として説明し得るもの、錯覚、妄想、さてはためにする虚偽の報告等がかなり含まれているものと推察されるが、これら不確実と思われるものを除外してもなお既知の現象、理論等を以てしては到底説明し得ないもの、すなわち未確認飛行物体の例が残るといふことは厳たる事実である。

このことは空飛ぶ円盤騒ぎの発端以来、一貫して調査研究に当たってきた米国防空軍当局（米国は一九四七年九月、空軍部内にプロジェクト・サインと呼ばれる公式調査機関を設けた）の膨大な資料の中に、厳密な吟味を経たあとになお、数パーセントのいわゆる、未知の現象が残っていること、軌を一にしている。しかも当局は、再三にわたって円盤の実在を否定する公式声明を発表しつつも、今に日到的にもなお鋭意その調査研究を進めつつある事実（一九五一年、空軍技術情報本部内に前記調査機関の後身として、プロジェクト・ブルーブックが設置され、今日に到っている）。およびこれらの情報をもとに記述された後身としてを禁ずる軍規（AFR 12001）の存在は一体何を意味するか、実力と権威ある国防当局が単なる流説や曇気楼や集團妄想などを調査するために貴重な国家予算を費消する愚を冒すであらうか。

また、ひとり米国のみならず、ソ連、英国、カナダ、フランス等の諸国に於ても非公然としてはあるが、未確認飛行物体の正体究明のために、公式の調査機関が設置され活動しつつあることはまぎれもない事実である。これはまた、一部流布されている秘密兵器説を根底から覆えすに足る証拠といわねばならない。

これも諸国の政府当局者が、大気圏内に正体不明の飛行物体が出没するという事実をひろく国民大衆に知られた場合予想される国内の政治的・経済的恐怖や、さなきだに微妙な国際政局に及ぼす不測の影響、さては彼等自身の立場を考慮して、その事実を率直に認めることができず、終始曖昧な態度を続けねばならぬ事情は、われわれとしても同情するにやぶをかてはないが、真実はいつの日か白日の下にさらされるべきことを思うとき、果してこの方策が賢明なものであるかは頗る疑わしいところである。

これに反し、ブラジル並びにオーストラリアの両国政府は既に世界にさきかけて空飛ぶ円盤の実在を確認する公式声明を行ったということは誠に注目すべきことである。しかも最近に到り、ブラジル海軍の手によって撮影され、発表された円盤写真、円盤非実在論者を顔色不からしめる極めて信憑性の高い物的証拠というべきである。

以上の如き世界最高首脳層の姑息的態度に加えて、今日のところでは空飛ぶ円盤問題が人類社会のどの部分に對してもならん具體的影響を及ぼしていないため、換言すれば未確認飛行物体の存在それ自身が世界の政治・経済・外交・文化等の諸活動にならん直接的影響を与えていないために、目前の国際情勢や日常生活に對応することにのみ追われている世人はや、もすると円盤問題の包蔵する重大性を著し過ぎ勝ちである。

また、この問題に對する解答者としては最も適當である筈の自然科学者は、いわゆる象牙の塔にたてこもり、彼等の説明し得ないものをすべて異端視する傾向のお、うべくもないことは、われわれの最も遺憾とするところである。未知を探り、真理を追求することを使命とする科学者の、これは正しい態度といえるであらうか。昨日の仮説は今日拡充され、今日の理論は明日喪り去れることは科学界の常識であり、それはとりもなおさず科学発展の歴史を示すものである。例を理論物理学の歴史にとつてみても、ニュートン以来の古典物理学は相対性理論、量子論によつて書き替えられ、今また統一場理論への発展を試みようとしている。ニュートン時代の物理学がよく核エネルギーを生み出し得たであらうか。四次元宇宙の現象を捉え得たであらうか。空飛ぶ円盤が現代科学の殿堂のどの部分にも安住の余地がないからといって、明日の科学によつてもなお説明し得ない何人が断言できよう。

仮に空飛ぶ円盤を他の天体に存在する知的生命が作り出した宇宙機であらうと推測した場合、その存在性・機構性・行動性が如何に今日の天文学・物理学・航空工学を超越したものであつてもそれは円盤自身の罪ではないのみならず、現代の天文学が敗れるところとさえ、地球以外に知的生命の発生する十分の可能性を認めている。人類よりもさらに高度の知性が遙かな空間を越えてわれわれの世界に到達しているとしても決して驚くべきこととはなく、むしろ当然なこと、いわねばなるまい。そしてこの解釈こそが現在のところより得る最も納得のゆく帰結であることを認めないわけにはいかない。

人類の未来にとつて円盤問題が吉兆であるか兇兆であるかは、現在の段階では何とも予測し難いが、いずれにせよ、宇宙時代の黎明を迎えた人類の今後の運命に重大な影響を及ぼすであらうことは想像に難くない。それと同時に、空飛ぶ円盤の謎の解明こそは、有史以来嘗々として蓄積されてきた全ゆる学問・知識・文明の諸成果を総動員して当らねばならぬ大事業であることに想いを致すとき、われわれ未確認飛行物体の研究者は一日も早く、全世界が総力を結集してこの史上未曾有の謎に取り組み、その真相を究明するの要を痛感するものである。

一九五八年 三月一日

日本空飛ぶ円盤研究会

代表 荒井 欣一